

令和6年度第1回環境基本計画策定検討部会 会議録

日 時 令和6年11月14日（木） 午前10時～午前11時45分

場 所 京都市役所本庁舎1階 環境政策局会議室（環境総務課執務室内）

※オンラインとのハイブリッド

出席者 大久保委員◆、大島委員、尾崎委員、小幡委員、千葉委員◆、山口委員、
吉積委員◆（五十音順）

◆：オンライン出席

1 開 会

中村環境企画部長から挨拶

2 議 題

○ 次期京都市環境基本計画の策定について

- ・ 事務局からの資料1及び資料2についての説明を踏まえ、意見交換。

（吉積委員）

私は今、シンガポールに滞在してしまして、先日、ジョホールバルで開催された、京都の京エコロジーセンターを京都モデルとして、アジアの環境のまちづくりを学ぶというシンポジウムに参加しました。参加者の皆さんは熱心に話を聞かれており、是非、京都モデルのアジアの環境都市を作っていきたいと言われていたので、このような声も上がるぐらい、京都は世界でも注目されている都市の1つということです。パリやロンドンに並ぶような都市にもなりますし、京都議定書により、環境に対して熱心な京都とも認知されていますので、今後、環境基本計画は、世界やアジアに発信できるような、誇れるようなものにしていきたいと思いました。

次に、次期計画の検討には、国の第六次環境基本計画を参考に考える必要性や、また、この計画に倣う必要性があるかどうかを検討する必要があると思います。国の第六次環境基本計画が、前計画と大きく変化しているポイントとしては、目的が「環境保全」ではなく、「環境保全を通じたウェルビーイング」という構造になっている点です。このウェルビーイングを上位目的に設定した上で、重要な視点として、経済全体の高付加価値化等の受け入れ、自然資本重視などが挙げられています。そして、重点戦略として、環境、経済、社会の統合的向上の高度化が強調されています。そのため、今後、次期計画の検討においては、この点を踏まえた議論が必要だと思います。計画の構成が大きく変わるポイントだと思しますので、変える必要性があるか否かも含めた議論が必要だと思います。

（小幡会長）

国の第六次環境基本計画の中で、社会、経済と環境を統合していく、その目標にウェルビー

イングとありますので、これを次期計画の中にどのように溶け込ませていくかを議論していければと思います。

○ 京都市環境基本計画の進捗状況（令和5年度）について

- ・ 事務局からの資料3についての説明を踏まえ、意見交換。

（大島委員）

改めて環境に対しての取組をととてもたくさん実施されているなど感じましたし、読むだけでも大変勉強になると思いました。すでに配布やホームページへの掲載をされているとは思いますが、教科書にする等、もっと他に活用しても良いのではないかと思います。

最近の取組としては、ジモティーとの連携等、非常にユニークな取組も展開されていると思いますが、梅小路公園で開催されている循環フェスでは、衣類のリサイクル等を積極的に取り組まれているのが最近の特徴だと思います。アップサイクルの取組が浸透するように、古着に対してポジティブに評価するという風潮もありますので、そういった動きについても着目し、後押しすることがあっていいのではないかと思います。

また、京都の特徴は、若者、地域、企業、そして海外からの観光客であり、そういった人々を主要な対象として考えていくような、そんな目線の取組があっても良いのではないかと思います。

（事務局）

ファッションロスに対する取組は、衣類業界でも取組が進んできています。また、本市では、「RELEASE⇔CATCH」（リリースキャッチ）という取組を、2050京創ミーティングの実証プロジェクトの一つとして民間事業者と連携して実施しています。衣類を回収するボックスがあれば、そこに衣類を持って行き、入れていただき、それが循環フェス等に回っていくというような形になります。こういった取組について、特に大学生が関心を持ち、循環フェスでは若い人が多く来場されています。また、去年は、大学生による環境学習の取組として、大学生の皆さんと動画を作成し、その動画の中でもリリースキャッチの取組を紹介しました。

（小幡会長）

衣類のことについて記載することの検討をお願いします。海外向けについては、京都市はこのような計画を作っているということ、1枚ものでも良いので作成し、インバウンドの方が来られるような場所に置くことも検討をお願いします。大学などとコラボして作成しても良いと思います。

（大島委員）

吉積委員の意見のように、内側の目だけではなく、外側からの目も非常に大事だと思うので、それを意識するため、簡易版でも良いので、英語など多言語化が必要だと思います。

(事務局)

衣類については、「RELEASE⇔CATCH」(リリースキャッチ)などを、2050京創ミーティングの実証プロジェクトの一つとして、環境レポートに追記します。国外への発信については、簡易版も含め、発信の手段を今後の課題として検討します。

(大久保委員)

海外からの旅行者に対しては、「これをしてはダメです」ということよりも、「この行動をしてくれたあなたは、京都を守るためにこういう貢献ができる、これが守られる」といったことを写真等で見せるだけでも全然違うと思います。

(事務局)

ごみを有料化して意識付けをするという取組が、錦小路にあったように思います。

(大島委員)

錦小路の取組では、ごみを有料化することで、自分がお金を払ってごみを捨てるということで地域に貢献するという意識を持ってもらうということだと思いますが、それがスタンダードなるかということ、なかなか難しいのではと思います。

(千葉委員)

実績を拝見し、とても施策が充実していること、それぞれの取組が進んでいるということが分かりました。ただ、長期的目標3について、現在のプラスチック問題に関する世界的な意識の高まりからすると、若干、記述が薄いような印象も受けましたので、次期計画では、記述を厚くしていけるとより良いものになるのではないかと思います。今月末には、プラスチックの環境汚染規制に関する国際条約を議論する政府間会合が韓国・釜山で始まりますが、次期計画の検討では、その議論を見越したプラスチック対策を進めていくための方針や対策を入れてはどうかと思います。

マイクロプラスチックの調査も、京都大学や総合地球環境学研究所等の研究機関で先進的な調査が行われていて、京都市の河川を通じた大阪湾のプラスチックの流出も明らかになっています。循環型社会推進基本計画で分別リサイクル、それから適正回収を入れていただいているのですが、分別・回収とプラスチックの環境中への流出は必ずしも同じ問題ではないため、その辺りの研究結果を踏まえ、また、プラスチック関係は他部署も関係してくることもあるので、この総合的な環境基本計画でしっかりと傘をかけて、様々な取組の方向性や施策を示していくことで、次期計画の厚みを出していけると良いのではないかと思います。

(事務局)

令和3年度、令和4年度にマイクロプラスチックの調査を京都大学と連携して実施したこともあり、昨年度までのレポート（令和4年度実績）には記載していたのですが、令和5年度は実施しておらず記述がないという状況です。

(小幡委員)

計画策定の論点に入ってくると思いますので、実績なしの場合であっても、記述がある方が良いと思います。

(山口委員)

先月、エコバスツアーに参加し、さすてな京都と使用済てんぷら油の燃料化施設を見学しました。エコバスツアーが始まった当初は、バス自体が綺麗だったが、今回見たところ、汚れていました。なんとかできないのかという声も聞くので、是非検討していただきたい。

使用済てんぷら油は、市バスやパッカー車等の燃料に利用されており、家庭から出た分で足りない分は事業者から購入しています。使用済てんぷら油の利用の方が値段的にはかなり高くなりますが、バイオ燃料ということで活用されています。世の中では航空燃料としても使われていますが、京都市がこれからどう進めていくのか、あるいは値段が高くなるからやめる等、そういった方向性も示すことができれば良いのではないかと思います。引き続き活用するのであれば、てんぷら油も家庭での利用が少なくなっていると思うので、使用済てんぷら油を回収するというシステム自体をもっとアピールした方が良いのではないかと思います。

(小幡委員)

今後どうしていくのかを論点として検討できればと思います。

(事務局)

過去には、バス1台をエコバスツアーのために持っていたということもありますが、経費削減の観点で共用で使用する状況になっています。

○ 次期京都市環境基本計画策定の論点について

- ・ 事務局からの資料4についての説明を踏まえ、意見交換。

(事務局)

現行計画の4つの基本施策は、施策を推進する本市側からすると、組織体制にも沿っており、非常に分かりやすく、施策も進めやすいと考えています。一方、市民の皆様側からす

ると、自分たちが何を取り組めばよいか、また実感度という点についてはどうなのか、委員の皆様のご意見を聞かせていただきたいと思います。次期計画では、そうした現行計画を補完するようなものが必要なのではないかと考えています。

(大島委員)

現行計画と構成が根本的に変わるのでしょうか。とりわけ環境の取組は継続してアプローチしていくこと、考えていくことが大事だと思います。例えば、レポートP33の長期的目標3の各指標はとても高いですが、千葉委員の意見のように、プラスチックの河川流出等、その辺りについては増えていないため、時代に応じて、あるいは課題に応じて内容も更新していくことが大事だと思います。そのため、このように満点が続いたらこの部分はクリアということで、次の目標に取り組んでいくということで良いとは思いますが、一方で、生物多様性については、なかなかどうすれば良いのか分からないということなのか、評価も高くないという結果です。根本的に変えてしまうと、現在の課題が見えなくなってしまうので、大きくは変えずに、マイナーチェンジや基本軸にしながら少しずつ更新する方がテーマ的にもふさわしいと思います。

(小幡委員)

分野別の個別計画をまとめて環境基本計画というだけでは、環境基本計画は具体的に何をしているのかという話にもなりますので、2050年はこのような社会といった全体の方向性や、人、社会、経済との関わりではこのようなイメージといったことを書いて、それらが分野別の計画に入っていくといった議論になると思います。

(大久保委員)

次期計画策定に向けては、どれだけ多くの人の意見を取り入れることができるかがポイントになると思います。京都市で環境保全活動に参加している人は、指標をみると30万人弱ということで、人口の25%は何らかの形で参加しています。そして、エコバスツアーも先ほど意見がありましたが、年間30回も実施されています。維持が難しくなってきたとはいえ、ご近所さんのような地域の活動、あるいは人が繋がるといった積み上げがあるところが京都の強みではないかと思っています。

そこで、国の第六次環境基本計画でも、ウェルビーイングとともに、参画・協働の視点が再度強化されています。その点はこれからも引き続き京都の強みでありますし、京都市の計画はウェルビーイングを考えてきているわけなので、従来計画を基礎にしつつ、統合的な取組をしっかりと共通の軸として打ち出していき、加えて新しい視点を持つ。そして実際の取組を強化する、そうした見せ方をしていくのではないかと考えています。

論点の「2 空間的な多様性」と「3 人や活動の多様性」がセットになると考えていますが、今回ご提案いただいた、空間的な多様性の中で環境配慮指針を考えてみてはどうか

という提案は、かなり面白い取組であり、私はなるほどと思いました。事業者にとっても市民にとっても、どういう地域の特性があるのかということが共有されることによって、どんな取組ができるのか、何を守るべきなのか、何をしたら貢献できるのかということが可能性として予測できると思います。

土地利用に関しては、都市計画マスタープランもあれば、農地（農業）に関しては、「KY OTO Vege Style」のようなサイトもありますが、そのように多様なものがあることが、市民や事業者にとってはなかなか見えにくいと思います。

例えば私の学校の学生も、実際に「京都一周トレイル」を歩いて、初めて京都の森はこんなに様々であるのかと印象を持ったという感想が多いです。そういうのを見せていく、それから、都市農地と言ってしまうと一言なのですけれども、まずこういう特性が各地にあるというものを配慮指針で明らかにして、次はマップみたいなもので充実させていく、あるいは、様々なデータベースがすでにありますので、それらをポータルサイト化していくことによって見えてくるかと思っています。そういうものがあると実は京都の文化が京都の環境に根差しているという、バイオカルチュラル（生態文化）という世界的な取組の先進的な事例となってくると思いますし、そこを支えるのがコミュニティあるいは様々な環境保全活動であるということを出せると思います。その部分を横断軸として打ち出したうえで、分野別計画がそれぞれあるといった見せ方は良いのではないかと思います。

（小幡委員）

ウェルビーイングを実現するため、参画と協働はベースに置きたいと思います。また、環境配慮指針ですが、大久保委員の意見のように、「生態文化配慮指針」など、もう少し柔らかい言葉で、土地利用等、例えば森林等、そういうものを分けて示していくこととし、それらをポータルサイト等でまとめていく、そのように全部統合していくことで、社会と経済とか統合できていくような方向性ということも考えていければと思います。

（千葉委員）

「京都にとってのウェルビーイング」のようなものがビジョンになっていくとは思いますが、それは結構難しいと思います。ウェルビーイングと言っても、やはりその国、地域、文化によってかなり異なっています。ウェルビーイングは、自分が今楽しいというようなところから始まり、将来も希望が持てて、そこから更に周りの人も幸せにしていきたいということが言われていますが、それを考えた時、京都は人の入れ替わりが激しく、例えば大学生であれば、そこまでの深みに至るまでに京都を去ってしまう人がほとんどだと思います。観光客にしても、やはり今が楽しいというところが1番重視されます。長期に渡って住んでいる人たちと、深みに至るまでに京都を去ってしまう人がいる中のウェルビーイングとは何なのかというところが、イメージしづらい気がしますので、むしろビジョンをオープンな場で考えていく必要があると思います。それにより、そもそも皆さんに

とってのウェルビーイングとは何なのかみたいなどころを見せていけるよう、作っていくと良いのではないかと思います。

あと、特に3つ目の論点である「人や活動の多様性」について、若い世代も巻き込んでいくことは、京都から外に発信していくという意味でも、京都のまちを良くしていくという意味でも、すごく大事だと思います。ただ、大学生は、環境に関心のある人たちはすでに参画しているのが現状で、例えば、鴨川の河川敷で飲食をして、そのごみを鴨川に捨てる学生たちは未だにいます。おそらく、このような環境に関心がない人の方が多い中で、そういう人たちに対して、環境に関心のある若者たちからどうメッセージを届けてもらえるか、行政から若者へという発信だけではなく、若者から若者へ、若者から外へというような発信の方が強いと思います。そういった普及啓発の取組を行政としてどうサポートできるか盛り込んでいけると良いのではないかと思います。

(小幡委員)

京都には若い人、高齢者、ずっと住んでおられる方、観光客、学生期間だけの人もいる中で、京都の人間とはどんなものなのかを考えてウェルビーイングを考えるようなことが大切になると思います。また、参画と協働の観点から、環境について関心がない人が意識を高めるための何かアイデアがありましたら聞かせてください。

(大島委員)

例えば、ある人にとっては、鴨川はリスペクトすべき京都を象徴する場所だと思うでしょうが、それはあくまで本人だけの価値観になります。そういった様々な価値観を持った人が住んでいるコミュニティがあるのが京都だと思いますので、逆にみんなで同じ価値観を持つことは難しく、多様な価値観を認めながら、どの部分を守っていくのか、そこだけでも共有できたら良いと思います。

(山口委員)

大学生になってからでは遅いので、小学生等、もっと小さい頃から意識付けみたいなことを取り組む必要があると思います。例えば、さすがに京都では、「2回以上行ったことがある」と、喜んで参加してくれている子どもたちも実際にいます。そういう子どもたちは、きっと大人になっても意識が高いと思います。そういう意味でも、地域では小学校と一緒にクリーンキャンペーンを実施しています。少し行動するだけで、ごみがすごく気になるようになります。そうすると、自分もごみを捨てたらいけないという意識が刻まれると思うので、やはり小さいうちから教育に力を入れていくことが大事だと思います。

(大島委員)

一方で、道にごみを捨てるのが別に問題ないという文化の国もあるわけで、そういう意味では、京都は、異なる文化で育った人がインバウンドで来られる、非常に流動的な都市と

もいえます。そういう観点では、どんな取組で、どんな発信で、どういう風に巻き込むのか、すでに京都市も様々な取組をされていますが、特効薬と言えるものは非常に難しいと思います。

(山口委員)

私は地域でゴミ拾いをやっていますが、7、8年続けていると、徐々に地域が綺麗になってきました。そのうち、歩道の草を抜く人も出てきました。歩道の片側だけが綺麗で、反対側が汚いと、反対側の人も草を抜くようになり、地域全体がさらに綺麗になってきました。このように、誰かが心がけて行動すると、それが伝播していきます。そういったことがすごく嬉しく、実感が湧くと思います。

(尾崎委員)

家庭の中で、親のしつけという形ではなく、常日頃から、このごみはここに捨てるといった、少しのアドバイスや一言があれば、子どもたちも同じように行動すると思います。環境に関する教育もちろん大事ですが、まずは、親世代がしっかりと学び、子どもたちに普通に教えることができる家庭があれば、少しずつ良くなっていくと思います。

3 閉 会

(以 上)